

2018

慶應義塾大学  
湘南藤沢キャンパス(SFC)  
フランス語研究室

フランス語海外フィールドワーク奨学金  
2018 年度報告書

比留川 路乃



2018 年度

フランス語海外フィールドワーク奨学金

報告書

文化や芸術の「翻訳」と価値づけ  
「ジャポニスム 2018：響きあう魂」をフィールドに

慶應義塾大学 環境情報学部 4 年  
比留川路乃

## 目次

はじめに .....	3
1. 研究概要 .....	4
2. 研究背景 .....	4
3. 研究意義 .....	5
4. フィールドワーク活動内容 .....	5
5. 考察 .....	20
おわりに .....	24
Résumé .....	25

## はじめに

この度 2018 年度フランス語海外フィールドワーク奨学金をいただき、個人研究を行う機会を頂戴しました。私は SFC 入学を機にフランス語学習を開始し、念願のフランスへ訪問することができました。かねてより、文化や芸術を育む社会的組織での「場づくり」の実践に興味がありました。大学ではコミュニケーション学や社会学を関心領域とする研究室に所属し、「場づくり」についての実践的な調査・研究やフィールドワークを実施してきました。またサークルでは茶道に精進したり、他学部で学芸員課程を履修したりと個人での活動をすすめてきました。今回は絶好のタイミングが重なり、文化や芸術への関心が高いフランスのパリで開催された「ジャポニスム 2018：響きあう魂」の現場へ足を運び、観察による記述とパリ日本文化会館で働く運営の方々へ取材をすることができました。大学入学当初から自身が実践してきたさまざまな活動での学びや経験を活かし、未知なる土地で挑戦する機会となりました。それでは以下より、報告をさせていただきます。

## 1. 研究概要

本研究は、「ジャポニスム 2018：響きあう魂」という文化外交において、日本の文化や芸術へどのような価値やものがたりが加えられ、フランスのパリで発信されていたかを問うものである。「ジャポニスム 2018：響きあう魂」では、パリのいたるところで日本の文化や芸術に関するイベントが開催された。日本の地を離れ、フランスという異なる文化圏で文化・芸術作品を表現するには、「翻訳」してメッセージを発ししなければならない。この日仏の間に立つ人びとによる「翻訳」プロセスに注目し、さまざまな<モノ・コト>の関係性のなかで調整や工夫をしながら、如何なる目的でどのように文化や芸術が表現されていたかを捉えたい。

今回のフィールドワークでは、日仏友好 160 周年記念の「ジャポニスム 2018：響きあう魂」で開催された、さまざまなイベント会場へ足を運び、観察と記述による「場」の成り立ちについての理解を試みた。またパリ日本文化会館でジャポニスムを運営する人びとへのインタビュー調査を実施した。

## 2. 研究背景

「ジャポニスム 2018：響きあう魂」は、日仏友好 160 周年を記念した複合型文化芸術イベントである。公式ウェブサイトの概要によると、フランスのパリを中心に 100 内外近くの会場で、展覧会や舞台公演にいたる、さまざまな日本の文化芸術が約 8 ヶ月間にわたって紹介される。このタイトルである「ジャポニスム 2018：響きあう魂」には、2 つの意味が込められている。1 つ目は、外部からの異文化を自らの文化と響あわせ融合させる日本の「美意識」であり、2 つ目は日本とフランスの感性の共鳴とされている（概要 | ジャポニスム 2018）。日仏両国の首脳による合意と声明とともに、日本文化を世界へ発信する取り組みとする文化外交として本イベントは位置づけられている。

そして「ジャポニスム 2018：響きあう魂」の現場では、展覧会やイベントという空間メディアを通して、日仏のありたい関係性が観察可能になる。主催者のコンセプトによって、空間メディアはいくらでも操作が可能であり、どのような空間・文脈・関係性で見せるか

で来場者の体験は異なる（長谷川，2013）。とくに今回の複合型文化芸術イベントでは、日本からフランスへ移動する異なる文化コンテキストでの表現となるため、新しい解釈を生み出す可能性はさらに増える。

### 3. 研究意義

本研究では、「ジャポニスム 2018：響きあう魂」でのフィールドワーク調査を通して、日本の文化や芸術がどのような目的で紹介され、また日仏間にどのような関係を成り立たせたいと考えられていたかを問う。「文化」という、互いに学びや理解を育むことができるものに対して如何なる価値づけがされ、複合型文化芸術イベントが企画・実現されていたかを明らかにしていきたい。

## 4. フィールドワーク活動内容

### 4.1. 活動概要

このフィールドワークでは、2019年2月20日から3月6日の2週間フランスのパリに滞在し、実地調査を行った。具体的な活動内容は、大きく下記の4つに分けられる。

- インタビュー
- 現場での観察
- 偶然の出会い
- 記録

### 4.2. インタビュー

今回のフィールドワークでは、合計で4名とのインタビューを実施した。1人目のV氏とは、渡仏前に日本でのインタビューを行った。2人目のS氏、3人目のK氏、4人目のA氏はいずれもパリ日本文化会館で働く人びとだ。パリ日本文化会館のホームページにある問い合わせフォームから本研究の企画内容を伝え、何度かメールでのやり取りを行うことで今回のインタビューが実現した。本報告書では、個人情報の扱いへの配慮から、氏名

の匿名化や写真のイラスト化を施した。



パリ日本文化会館

#### 4.2.1. V氏



V氏は、「ジャポニスム 2018：響きあう魂」のプログラムにある能と狂言の台本の翻訳を手がけた。V氏はパリ出身のフランス人で、小さい頃より日本文化へ触れる機会があった。日本で人形浄瑠璃と出会い、約 10 年間その活動に携わっている。このような経歴を持つからこそ、「ジャポニスム 2018：響きあう魂」の運営に携わる国際交流基金やさまざまな繋がりがあり、今回の依頼を引き受けることになったという。

翻訳については、3つの能作品「砧」「清経」「葵上」と2つの狂言「木六駄」「二人袴」を手がけた。「ジャポニスム 2018：響きあう魂」以前に、Festival de l'imaginaire という行事で翻訳をしたが、ほぼ手がかりがないなかでの経験となった。能楽の専門家からのアドバイスを受けながらプロジェクトがすすめられた。プロジェクトの話を持ちかけられたのが 2018 年 4 月、実際の作業は 7 月からはじまり、最初の締め切りは 9 月だった。作業は V 氏 1 人だけでなく、能楽の専門家から

のアドバイスのもとで行われた。このとき、その専門家の娘がフランス語に堪能であった。つまり、能楽の専門家、日本文化に精通したV氏、フランス語と日本語を駆使できる3者のコラボレーションがあり、今回の翻訳プロジェクトが成立した。作業のほとんどはEメールで行われた。最初はそのままセリフを訳し、そして短縮するというステップが踏まれたが、そのプロセスは3者の協力のもとすすめられた。

「フランス語への翻訳の際に、何か意識することはあったか」と尋ねると、たくさんあったと回答が得られた。V氏によると、劇を鑑賞するとき、フランス人は「理解する」(=*comprendre*) こと、日本人は「感じる」(=*sentir*) ことを求める。また能には字幕がないため、どのようにフランス人へ伝えるかを考えなければならなかった。そこで翻訳したセリフを、シーンごとで要約する手段をとった。V氏は能と狂言の専門家ではないため、シーンのまとまりで何が大切なのか、作品でどのポイントを際立たせるかを選別することに苦労した。V氏にとって、この選別作業は興味深いと同時に、ストレスであったことも事実だ。

例えば、狂言のなかで、登場人物が「青梅」を食べたいと主張するシーンがある。酸っぱくなるものが欲しい、つまり妊娠の報告を示唆している。このような表現をフランス人が理解するのは難しいかもしれない。もちろん状況を説明することはできるが、説明的になると本来の良さが失われる。すなわち、説明をする量を考慮しなければならなかった。劇を見て、言葉を聞き、想像し、心で感じる、という循環をどのように作りだすかが翻訳のポイントとなった。また「清経」は時代物の作品であるため、平家物語の歴史的背景を踏まえ、海への飛び込みで命を絶つシーンが含まれる。このようなトピックは、フランスでは倫理的な観点から論争になりうる可能性もある。さらに狂言の「木六駄」には字幕が入る。50文字のフランス語に訳さねばならず、複雑なパズルをはめ合わせるようにコンパクトにする必要があった。実際、狂言の映像を何度も見ながらの作業となった。役者は日本語の台本どおりに発話するとは限らず、劇のなかでの動きにあわせながら、日本語の音のリズムに適したフランス語の言葉を選ばなければいけない。



人形浄瑠璃の活動をする V 氏にとって、今回の翻訳の経験は日本文化をより理解できる機会になった。同じ「翁」という話でも、人形浄瑠璃と能ではまったくの別物であるらしい。インタビューの際にも、A4 の紙にぎっしりとフランス語で書かれた数 10 ページのノートや、能と狂言の台本に書き込まれたメモを見せてもらった。

#### 4.2.2. S 氏



S 氏はパリ日本文化会館の設立から携わる日本人だ。今回は「ジャポニスム 2018：響きあう魂」の運営についての話を伺うことができた。

パリ日本文化会館は、1997 年「フランスにおける日本展」をきっかけに設立された多目的ホールのような施設である。

土地はフランス側、運営は日本側が請け負うという体制で、時はバブルの時代で日本の経済が発展していた。経済だけでなく、文化を示す手段として経団連の主導で設立された。政治、経済、文化を循環させて官民合同で発展させていくことが念頭に置かれた。とくに、文化の面では相手と仲良くなりやすいという点に期待が寄せられた。S 氏によると、パリ日本文化会館の館内はすべてフランス語のみで表記されている。パリ日本文化会館は日本人のためだけの組織ではないことを示すためだ。

「ジャポニスム 2018：響きあう魂」については、3 年前の 2015 年頃から日仏両国の共同で構想がはじまった。日本文化を、文化的な歴史があるフランスへ働きかけることで、周囲からの関心度が高まるだろうという狙いがあった。国際交流基金によって、北斎についての展示は話題にもなったし、好評を博しもした。若冲の名はフランスではまだそれほど知られていなかったが、広報のおかげで人気に火がついた。「フランス人がまだ見たことのない日本文化を」という方針のもと、10 年ぶ

りの歌舞伎上演や映画の上映がされた。また「藤田嗣治」展については、藤田がまだ画風を模索している時代や戦争画すべてを展示することで、日本文化と西洋の融合という側面を示すことに焦点が当てられた。フランス人にとっての藤田は、パリに滞在していたときや裸婦画が有名なため、違う部分を展示することにした。学校教育課程にも働きかけ、児童・生徒が社会見学で「藤田嗣治」展を訪れたこともあった。

「ジャポニスム 2018：響きあう魂」を通じて何を指そうとしているのか」と S 氏に尋ねると、間接的に日本を知り、関心を持ってもらうことで日本へ訪問してもらえれば嬉しいという回答を得た。実際、1 万年前の縄文時代のものから、初音ミクやチームラボという最先端のものまでが展示で取り扱われていたように、新旧の共存と文化資源の多様性を発信することが目標とされた。来場者からのリアクションが得られる地場をつくり、文化を発信することで日仏の関係が強くなっていく。また新聞からの評価をふくめ、他者から違う見解やリアクションをもらうことがきっかけとなり、文化が活性されていくと S 氏は述べた。

#### 4.2.3. K 氏



得られたのではないかとふりかえる。

K 氏はパリ日本文化会館の現地職員で、会場設計、輸送、カタログのさまざまな担当をするため、自身をオーガナイザーとして認識している。インタビューでは、パリ日本文化会館での展覧会企画にまつわる話を伺うことができた。例えば「井上有一」展の場合、枠から外れた書が印象に残る作風であるが、とくに“貧”をテーマにした作品はフランス人の理解を

今回の「藤田嗣治」展は、日本側が監修を務め、パリ市内の美術館を巻き込む形で実現された。しかし、同年の上半期にモンパルナスで「藤田嗣治」展が開催されたため、それとの差別化をどのように図るかということが議論になった。作品は、たくさんの日仏の美術館から集められた。パリの美術館では基本的に写真撮影が可能だが、今回の展覧会では許可されていない。フランス側と日本側での著作権の扱い違うため、権利関係のなかで許可を得なければならなかったからである。空間設計はフランス人女性建築家によるもので、絵画を見ることから、いわゆる「引き」を活かした空間が設計された。入口と出口が同じであり、自由に周回できるように考慮された。一般的な展覧会では、作品とキャプションと一緒に展示されていることが多い。けれども「藤田嗣治」展では展示数が少なかったため、壁一面を大きく使いながら解説文を掲載していて、スペースが有効に使われていた。

パリ日本文化会館そのものについては、コレクションがなく常設展を行っていないため、幅広く柔軟に展示スペースを確保できることが強みだと主張していた。開館当初は焼き物、楽焼や和紙の展示が多かったらしい。K氏は展覧会づくりに長く携わっていて、作品を傷なく元のところへ返せたときが一番落ち着くと言う。それが責任であり、まるで危機を乗り越えたときのようにだと表現した。

#### 4.2.4. A氏



A氏はパリ日本文化会館で映画上映の担当をしているフランス人で、映画をベースに活動している。20年以上、パリ日本文化会館で働いている。「ジャポニスム 2018：響きあう魂」では、「日本の映画 100年」と題して、119本の映画がパリ日本文化会館で上映された。映画の選出は、シ

ネマテーク・フランセーズと日本にある大学の関係者、そしてA氏という3者の共同作業で選ばれた。A氏は、日本の戦前つまり50年代の映画を上映したいと主張した。なぜなら、この時代に、日本の映画史のなかで重要かつ大きな映画が制作されたからだ。しかし日本側は、戦争ではなく日本の綺麗なイメージの演出を望んだ。それでもフランス側は、「ジャポニスム 2018：響きあう魂」を機に、日本で戦争がどのように受けとめられていたかということフランスの観客に知ってもらうために、戦前映画の上映を主張した。A氏は、質が良く、未だに知られていない作品を上映することを目指した。実際、フランスではじめて戦前の日本映画が上映されることになった。

映画が選出されると、次は映画会社とのやりとりになる。フランス側は、フランスでよく知られている日本映画にも付加価値を要求し、比較的最近に上映されたものはデジタル4Kでの上映が実施された。また昔の映画については、字幕を追加する形となった。

「ジャポニスム 2018：響きあう魂」以外にも、文化政略についての話も伺うことができた。A氏によると、今の時代は、政府は施設を提供してくれるだけのことが多く、資金は民間のスポンサーを見つけなければならない。今回の「ジャポニスム 2018：響きあう魂」は、NHK Worldの支援を得た。限られた予算から決断しなければならないため、アイデアが浮かんでも実現することが難しい。だから、使えるリソースのなかで良いものを制作しなければならない。また「日本の映画100年」を観に来た人たちについては、若い人たちには新しい映画を好んでいる傾向があるのではないかと分析していた。

A氏は執筆活動にも従事している。A氏は、すでに書かれているものを新しく書き直すことは、著しく疲れるけどもクリエイティブな仕事だと捉えている。翻訳については、AIの台頭もあるけれど技術的なものでしかないと主張する。そこには心がなく、人が心なしに生きる道を選ぶとは思えないからだという理由を語った。常に楽しく、人生を豊かにすることをしたいと話をつづけた。

今回のインタビューでは、実際の貴重なフィルムを見せてもらうことができた。またパリ日本文化会館にある映写室も見学させてもらった。もう今では製造されていない映写機が2台あり、また字幕投影に大切なコンピュータ室も設けられていた。

#### 4.3. 現場での観察

フィールドワーク滞在中、「ジャポニスム 2018：響きあう魂」のいくつかの会場へ足を運び、展覧会やイベントの様子を観察および記述をした。今回は写真を撮影し、その場がどのような<モノ・コト>の関係性のなかで成り立っているかを記述した。

##### 4.3.1. 「古都奈良の祈り」展 - ギメ東洋美術館

奈良・興福寺の代表的な3体の仏像が、大きなガラスケースで展示されていた。ギメ東洋美術館の書棚を背にした展示であり、暗室のなかでガラスケースに入れられた仏像が照らされている。仏像が書棚を背景に展示されている異様な光景であった。このように、場づくりに際しては現場の状況に応じて展示をつくることが求められる。



資料の解説文として、天井からタペストリーが吊られていて、興福寺や地蔵菩薩

像や金剛力士像の説明が日本語と英語とフランス語で書かれていた。それぞれの仏像に込められた意味や材質、文様や表現を中心とした解説文だった。しかし暗室での展示となる理由からか、タペストリーに書かれた文章量はそれほど多くない印象だった。情報を補う意味で、展示室の入り口には日本語と英語とフランス語でのパンフレットが配布されていて、より詳しく伝えるべき古都奈良のストーリーが掲載されていた。

#### 4.3.2. 茶の湯 - パリ市プティ・パレ美術館

「ジャポニスム展 2018：響きあう魂」では展覧会だけでなく、裏千家の茶会に参加することができた。お茶会は、パリ市プティ・パレ美術館のギャラリーの一角で開催された。



この一角は天井が高く、大きな西洋画が壁に飾られていた。自由観覧が許されていて、観衆は白い西洋式の椅子に座って茶会を楽しむことができる。観衆と対面する形で、茶席の舞台が設置されている。茶席の舞台は金屏風を背景に、茶道の棚（立礼棚）が置かれている。立礼棚には、茶碗や棗や茶杓という茶道に必要な道具がひと通り準備されていた。また金屏風には掛け軸がかけられていた。茶道に必要な道具は、基本的には日本の文化でありフランスのものと代替可能ではない。だからパ

りの美術館で茶会を開催するためには、順応にその場の空間や備品を合わせることで、雰囲気がつくられていた。

#### 4.3.3. 「BEYOND EAST&WEST 日本の伝統美が鮮やかに蘇る」展 - パリ日本文化会館

パリ日本文化会館では、ファッション、フラワー、ジュエリーの展示がされていた。ドレスモチーフは、日本の伝統的な織物や日本美術が用いられていた。展示されているドレスの周りにフラワーを添えることで、来場者のイメージを増幅させることができる。それぞれのモチーフ、ドレス、フラワーに込められた意味を解説するために、日本語とフランス語で書かれたパネルが立てられていた。またパリコレクションでの映像もディスプレイから常に流されていた。さらに、ドレスについては布の一部を実際に触れる体験コーナーが設けられていた。視覚や触覚という五感を活かすことで、来場者の想像力を刺激する展示だった。



#### 4.3.4. 「ジャポニズムの150年」展 - 装飾美術館

今回筆者が訪れたなかで、最も規模の大きな展覧会が「ジャポニズムの150年」展だった。時系列ではなく、テーマごとでの展示がされていた。例えば、茶道や琳派、また「動き」や「革新」という抽象度が高いテーマで区切られているところも

あった。展示室は壁一面が黒色で塗られ、資料は白や赤で強調されていることが多かった。けれども解説パネルは無く、必要であれば展示ケースの端に置かれている解説カードを、観覧者が手元に持って読まなければならない。つまり、この展覧会自体は作品を「みせる」ことに重点が置かれていて、ひとつひとつのビジュアルを際立せるための工夫がされていた。2フロアに分かれた大規模展示だったことから、来場者へ展示を見ながらストーリーを理解できるように「時間」が設計されていることを実感できた。



#### 4.4. 偶然の出会い

フィールドワークでパリに滞在中、「ジャポニスム展 2018：響きあう魂」の会場および知人からの紹介で、この複合型文化芸術イベントに携わった人たちと出会い、断片的ではあるが経験談を聞くことができた。

##### 4.4.1. H氏

H氏は、「BEYOND EAST&WEST 日本の伝統美が鮮やかに蘇る」展での展示、とりわけファッションの部分を仕切っていた日本人だ。パリ日本文化会館で、偶然にも話が弾むことになった。



ファッションの部分を担うのは、ユミカツラインターナショナルである。H氏によると、「日本」をモチーフとして「着物」という大切な文化を残していくミッションを掲げている。日本は外国から素晴らしいと指摘されることで自国の文化に気づくことがある。そのような側面を利用しながら、あえて世界に発信する使命感を持ってコレクションを展開している。さらに、パリの人びとには美術をきちんと理解しようとする姿勢が根付いているため、コレクションを発表することで日本文化を示し、改めて日本人も自文化を見つめ直すきっかけにしたいのだという。

「ジャポニスム展 2018：響きあう魂」での展示でも、ユミカツラインターナショナルのミッションは反映されている。例えば、葛飾北斎や鈴木喜一による江戸時代の作品からのモチーフを取り入れて、日本美術を表現している点だ。H氏によると、「理解」を求め、熱心に立ち止まることが多いフランス人に向けて、理屈を通じた細かい説明書きを施した。さらに各作品の背後にはイメージを増幅させるために花が生けられている。冬から春へと向かう桜と富士は淡さを表現し、寿司や菊の置物はポップな印象を与える。また実際のパリコレクションでのビデオを放映することで、コレクションのイメージを奮起させる。実際に布に触れる体験コーナーも設けられていて、触角から日本を伝えることを目指したそうである。

#### 4.4.2. 「茶の湯」での半東役

パリ市プティ・パレ美術館で開催された茶会では、茶道のなかで半東と呼ばれる人が、茶道の作法の意味や一体何が行われているかを説明していた。何度も席が開かれているため、合間の時間に半東役のフランス人の方と話をすることができた。

こちらの半東役の人は、20年間茶道を続けている。茶道は常に変化がある日本文化だから面白く、今に至るまで携わっていると述べていた。「ジャポニスム展 2018：響きあう魂」での茶会道具としては、基本精神を示した「和敬清寂」の掛け軸、季節にあった椿、また家元の立礼台が使われていた。半東の話のなかでは、清めて茶を出してまた清めるという、茶道が3つのパートから構成されていることが

フランス語で説明されていた。道具の詳しい説明はなかったが、利休が茶道をはじめた経緯についての指摘があった。

#### 4.4.3. K氏

「ジャポニスム展 2018：響きあう魂」の現代美術の分野で関わった日本人と話をすることができた。K氏は、継承だけでは文化を繋げていくことは難しいと指摘する。それでは昔ながらの自国の文化を提供しているだけであり、いずれ何も発表するものが無くなるだろうと危惧する。フランス社会からは外れたパリ在住の日本文化ファンだけが参加するか、あるいは上層部だけで盛り上がり終わってしまうという厳しい意見を抱いていた。また「ジャポニスム」という名称も、東洋文化への歪められた視線という批判されるべき側面があるにも拘わらず、今の時代にコンセプトとして採用するのはどうかと疑問視していた。

#### 4.4.4. Y氏

Y氏は、パリの日本料理店で修行をしている日本人だ。「ジャポニスム展 2018：響きあう魂」では、会合での料理を提供するという経験を持った。Y氏は日本料理を専門とするが、フランス人向けに形を変えなければならなかったと話す。例えば、皿を大きめにして出すことや、ソースを濃くすることといった、細かな調整に気を配るように努めたようだ。

またY氏は料理を提供するだけでなく、いち来場者として「ジャポニスム展 2018：響きあう魂」のイベントに足を運んだ。Y氏曰く、パリに滞在していたことで、日本から集められたあらゆる日本の文化芸術へ触れることができた。以前は現代美術に全く関心を示さなかったが、たくさんの企画が実施されたことで、自身の知見が広がったという感想を述べていた。日本に住んでいたときには経験できなかった、さまざまなものに触れられる機会になったと評していた。一方で、古い伝統を継承という目的で、表舞台に見せていくだけでは継続性は期待できないのでは

ないかという厳しい意見も持っていた。

#### 4.5. 記録

パリでのフィールドワーク中、いくつかの方法で日常生活および現場を記録していた。当初はあくまでも研究・調査を目的とした記録であった。けれども次第に、滞在中に出会った人たちへ、筆者が何者かを示すためのコミュニケーションを円滑にしてくれるメディアとしての機能が高まっていた。

##### 4.5.1. ブログ日誌

フィールドワークしていた2週間、毎日2000字のブログを投稿していた。佐藤(1992)によると、フィールドワークとは現場に流れるリズムやテンポに身を添わせることを通して、調査地の社会と文化をまるごと理解する方法である(佐藤, 1992)。今回のフィールドワークは、フランスと日本の異なる「文化」をひとつのテーマとしているため、日常生活を記録することで、まずは筆者自身がフランス社会全体の文脈を理解できるだろうと考えた。また毎日の活動をふりかえることで、今後すべきことや目標を日々定めることができた。以下が2週間の滞在記録を綴ったウェブサイトである。(https://medium.com/パリのすみっこから)

##### 4.5.2. 100人スケッチ

「ジャポニスム展 2018：響きあう魂」では、各種の展覧会やイベントに参加することができた。その際、「ジャポニスム展 2018：響きあう魂」に訪れた他の来場者の振る舞いをスケッチで描き出した。とある「場」を成り立たせているものは、どのような人びとがいかなる動作で向き合っているのかを観察とスケッチによってふちどることで際立ち始める。



100人というまとまった人数を記述してみると、比較的に年齢層の高い人びとが「ジャポニスム展 2018：響きあう魂」へ参加していたことがわかった。今回フィールドワークの日程の都合上、筆者が訪れることができたイベントが「古都奈良の祈り」展、「茶の湯」、「BEYOND EAST&WEST 日本の伝統美が鮮やかに蘇る」展、「ジャポニスムの150年」展のみだった。しかし「ジャポニスム展 2018：響きあう魂」はパリ内外の100近くの会場で8ヶ月間にもおよび開催されていたため、筆者が観察できたのはほんの一部にしかすぎない。公開されている報告書によると、最も入場者数の多かったのは「teamlab:Au-delà des limites (境界のない世界)」展であり、家族層に人気が高かったと記録されている(事業報告書, 2019)。またS氏への取材のなかで、縄文時代から現代アートまで幅広く日本の文化や芸術が展示されていると述べられていた。そのイベントごとに客層ターゲットを狙うことで、さまざまな世代へアプローチされていたのだと理解できる。

## 5. 考察

インタビューや観察・記述によるフィールドワーク活動を踏まえ、以下の4点について論じる。

- ネットワークの形成
- 「文化」とは
- 異文化間での「移動」は個人を高める
- ジャポニスム

### 5.1. ネットワークの形成

今回のフィールドワークでは、「ジャポニスム展 2018：響きあう魂」に携わるさまざまな立場にいる人たちと出会い、話を聞くことができた。直接的な運営に携わる人もいれば、間接的にプロジェクトとして参加した人など、異なる形でイベントに関わりをもち続けた人たちがいた。同じイベントでありながらも、「ジャポニスム展 2018：響きあう魂」に対する理解や見解はそれぞれ違う。

さまざまな要素が関与しながら関係が構成されていることは「アクター・ネットワーク」として捉えることができる（ラトゥール，2019）。「ジャポニスム展 2018：響きあう魂」には、いろいろな社会集団が関わっている。今回出会った人は、運営、デザイナー、翻訳者、料理人、客と多岐にわたる。ひとつひとつの社会集団は異なる問題を抱えているものだが、調整や工夫をしながら関係を結んでいる。このような関係性に注目することで、「ジャポニスム展 2018：響きあう魂」の全体像を理解できる。

### 5.2. 「文化」とは

「文化」は幅広い概念である。「文化とは何か」とは、議論多き問いの1つであり、決定的な定義があるものではない。文化外交と位置づけるとき、渡辺（2014）は「まず問うべきは、いつ、どこで、誰が、何を以て、誰に対して、何のために、どのよ

うに『文化』を線引きし、用いているかということになる」と主張する。人びとが、そのときどきで価値づけながら、生成し変化し続けていくものが「文化」だと捉えることができる。

インタビューのなかで、最も強く「文化」を文化外交として意識していたのがパリ日本文化会館のS氏だった。S氏にとって「ジャポニスム展 2018：響きあう魂」は、日本を経済以外の側面で示すための大きな手段であった。新聞でも好意的に評価されたことを、S氏は喜んでいて、メディアを通して日本文化を知ってくれた人たちが、いずれ日本へ来てくれることをS氏は望んでいた。このような発言からも、「ジャポニスム展 2018：響きあう魂」を両国の交流のきっかけとして理解していることが伺えた。

また「ジャポニスム展 2018：響きあう魂」の現場へ足を運び、展覧会やイベントの様子を実地で体験・調査したことでわかったこともある。日本の文化や芸術を提示したり表現したりする方法には、何を目的にするか、また何に価値を置くかということに応じて大きな幅があるということだ。例えば、茶の湯では、茶道の一部を時間や空間の制限あるなかで紹介し、できるだけ来場者に体験を促すことが目的となっていた。「ジャポニスムの150年」展では、具体的なものから抽象度が高いカテゴリーに分けられて資料が展示されていた。巧みな空間設計やデザインが付け加えられていて、日本の文化や芸術を「みせる」目的が強く反映されていた。

### 5.3. 異文化間での「移動」は個人を高める

今回の研究では、日本の文化や芸術がフランスという異なる文化圏で発信される「翻訳」のプロセスに注目した。ここでの「翻訳」とは、日本の文化や芸術をどのように捉え、いかなる意味や価値とともにフランスで発信していくかを指している。この問題意識には、いくつかのレイヤーがある。まずは「ジャポニスム展 2018：響きあう魂」のなかで与えられた立場からの意見だ。次にひとりの個人として抱く、文化や芸術に対する意見がある。

例えば渡仏前にインタビューをした V 氏は、能と狂言を翻訳するプロジェクトに関わったことによって、当初抱いていた日本文化への理解をさらに深めることができたと話す。また A 氏は、3 者で映画を選出するなかで衝突も多々あったが、刺激的な経験だったとふりかえる。つまり、「ジャポニスム展 2018：響きあう魂」を実現させるためのプロセス自体に、個人の能力を高めていく側面がある。

筆者自身もはじめてフランスのパリで 2 週間生活をするなかで、普段とは違う異文化圏での挑戦となった。日常生活のなかで、挨拶ができる、買い物ができる、地下鉄に乗り換えられるという小さな積み重ねは喜びや自信へと変わり、自身をフランス語圏に適応させていった。すなわち国境を乗り越える「移動」こそが、個人が持つ異文化へのキャパシティを広げていく。「ジャポニスム展 2018：響きあう魂」に関わる人たちへのインタビューや筆者自身がフランスという未知なる土地で日々を過ごすなかで、「異文化間での移動は個人を高める」という共通項を見出すことができた。

#### 5.4. ジャポニスム

今回は「ジャポニスム 2018：響きあう魂」という名の下、日仏友好 160 周年を記念した複合型文化芸術イベントが開催された。現地でフィールドワークをするなかで、「ジャポニスム」というそもそものコンセプトへ筆者は注目するようになった。馬淵（1997）によると、ジャポニスムとは、19 世紀後半にヨーロッパやアメリカの美術に与えた日本美術の影響である。ゴッホやモネが浮世絵の技法を真似たと言われているように、日本美術からヒントを得て、造形のさまざまなレベルにおいて新しい視覚表現が追求された。けれども一方で、「ジャポニスム」という概念は、歴史的に批判を受けている側面がある。西欧にとって日本は「幻想の異国」としての役割を果たし、征服者として優越した立場から日本を評している姿勢だと指摘されている。このように「ジャポニスム」とは、決まった定義があるわけではなく、双方の異なるまなざしによって形成される曖昧な実態だと認識することができる。

筆者はもともと、他者の歴史や過去に大切にしてきたものに触れることで、対話のきっかけが生まれ、互いの文化への気づきや学びにつながる可能性があるのではないかと考えている。かねてから文化や芸術を介する「場」を育むことに興味があり、プラットフォームとしてのミュージアムや文化施設へさまざまな視点からアプローチしてきた。展覧会といった公の場で文化や芸術を表現することは、主催者側の「ものがたり」や価値が付け加えられた「レプリゼンテーション」という形をとる。このとき、関わっていく他者との関係性をきちんと捉えなければ、一方的なまなざしや誤解を生みかねない。「レプレゼンテーション」に対するひとつの正解といったものは無いけれども、さまざま関係性のなかでその都度に最もふさわしい「場」を目指していくことが大切である。



## おわりに

はじめて、1人でフランスのパリへ訪れる機会となりました。パリには知り合いと呼べる人が1人しかおらず、期待や楽しみと同時に不安な気持ちもありながらフィールドワークを開始しました。しかし、現地でフィールドワークしていくうちに、日仏の間に立つさまざまな人たちとの繋がりが生まれていきました。異国の地での調査を支えてくださったとともに、今後とも関係を継続させていただきたい人たちです。今回のフィールドワークに挑戦したことで、パリというまちと人との縁をつくることができたのが大きな収穫となりました。この報告書とは別の形で、きちんと還せる形で引き続きまとめていく予定です。2週間という短い時間でのフィールドワークでしたが、今後もテーマを発展させていくために、フランス帰国後も弾みのある大学生活へと努めています。

最後に、國枝先生、宮代先生、西川先生は常日頃からフランス語を学ぶ楽しさを教えてくださり、フィールドワークの終始さまざまな場面で大変お世話になりました。本研究をご支援くださったすべての皆さまへ、心から感謝申し上げます。

## 参考文献

概要 | ジャポニスム2018、<https://japonismes.org/about> (2019年9月29日アクセス)。

佐藤郁哉『フィールドワーク-書を持って街へ出かけよう』新曜社、1992年。

ジャポニスム 2018 「ジャポニスム 2018 事業報告書」、2019年、  
[https://www.jpf.go.jp/j/about/area/japonismes/pdf/japonismes2018\\_report.pdf](https://www.jpf.go.jp/j/about/area/japonismes/pdf/japonismes2018_report.pdf)  
(2019年9月29日アクセス)。

長谷川祐子『キュレーション 知と感性を揺さぶる力』集英社、2013年。

馬淵明子『ジャポニスム 幻想の日本』ブリュッケ、1997年。

ラトゥール, B.『社会的なものを組み直す:アクターネットワーク理論入門』法政大学出版、2019年。

渡辺靖『<文化>を捉え直すーカルチュラル・セキュリティの発想』岩波新書、2014年。

## Résumé

En 2018, l'événement « Japonismes 2018 : les âmes en résonance » s'est tenu à Paris. À cette occasion, je suis allée vérifier comment la culture japonaise est représentée, en France, loin du Japon. Finalement, j'ai demandé aux organisateurs avec quelles valeurs le Japon représente son art et sa culture en France.

Pendant mon séjour, j'ai fait l'interview des organisateurs de l'exposition « Japonismes » qui travaillent à la Maison de la Culture du Japon à Paris. En plus de ces personnes, j'ai rencontré par chance des artistes qui participaient à cet événement. Selon les interviews, les opinions et les positions sur le nom de l'exposition « Japonismes » variaient. Par exemple, certains ont souligné que cet événement promouvait la relation entre le Japon et la France en matière de diplomatie culturelle mais non économique. Par contre, d'autres ont fait la remarque que la protection et la représentation de la culture n'étaient pas suffisantes.

De plus, j'ai visité quelques expositions dans des musées en prenant des photos et en dessinant. Ici, d'après mon analyse, j'ai pu remarquer que les styles japonais et français étaient choisis et ajustés avec harmonie. Pour le travail sur le terrain, j'écrivais des rapports journaliers tous les jours sur mes sensations par rapport à la culture française et à la vie quotidienne en France.

En conclusion, d'après mes observations, j'ai trouvé que le processus qui consiste à organiser un événement sur le japonisme entre les Français et les Japonais, et le mouvement de partage entre les sphères culturelles différentes donnent aux individus des occasions d'apprendre la culture de l'autre et différentes manières de communiquer. Par ailleurs, il m'a aussi semblé que les concepts exprimés et leurs représentations devraient toujours faire l'objet d'une discussion entre les organisateurs et les artistes afin d'être approuvés d'un comme accord.